

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、愛媛県立大洲高等学校の仙波鉄也先生が商業科で取り組んだ「奨学金の返還と滞納」を題材とした金融教育の実践をご紹介します。

生徒の素朴な質問を きっかけに

仙波先生は愛媛県立大洲高等学校で商業科の主任を務めています。普通科と商業科が併設された同校では、商業科からも毎年、半数以上の生徒が大学や短大、専門学校に進学しており、その多くが日本学生支援機構の奨学金制度を利用して入学金を支払っています。ところが、あるとき生徒の一人から「奨学金って、返さないといけないんですか…?」という質問を受けました。

「この質問は、社会問題化している奨学金の滞納について最も根本的なところを示していると思いました。金融教育プログラムのなかでも『住宅ローンや貸与型の奨学金などのローンの仕組みを理解し、返済方法



や金利、延滞時の影響について考える」とあるように、私も奨学金の返還と滞納については、制度を利用する前の高校生の段階でしっかり学

習しておくべきだと思います。この質問をきっかけとして、将来、教員たちが奨学金の返済で困らないように今回のカリキュラムを考えまし

愛媛県
愛媛県立大洲高等学校
仙波鉄也教諭

【図表1】指導計画（6時間）

指導手順	実施科目等
1：奨学金の滞納の問題に関する記事及び延滞者に関する属性調査結果の確認	HR 活動
2：生徒の奨学金予約（日本学生支援機構）の申込み状況について調査・分析 生徒の実態を把握するためにアンケートの実施・分析及び利息の計算	HR 活動
3：アルバイトと税金及びアルバイトと労働契約の確認	租税教室、HR 活動
4：月別収支一覧表、ライフイベント表、キャッシュフロー表の作成	課題研究「FP 講座」
5：消費者信用 ワークショップ～奨学金の返還と滞納～	経済活動と法
6：返還を滞納した場合の措置	経済活動と法

【図表2】奨学金の返還シミュレーション

返還例（第二種奨学金）		
貸与総額	貸与利率	返還総額
2,400,000 円	3.0%	3,018,568 円
月賦返還金	返還回数（年）	返還期間
16,769 円	180 回（15 年）	2019年10月～2034年9月

(注) 利率は 3.0% を超えないよう、政令で定められています。平成 27 年 3 月末貸与修了者に適用される利率（利率固定方式）は 0.63% です。

出典：日本学生支援機構「ホームページ」より

◎貸与総額と返還総額から何が分かるか、確かめてみよう！（日本学生支援機構の返還例参照）

貸与総額 **(¥2,400,000)** → 返還総額 **(¥3,018,568)** 返還年数 **(15 年)**
(端数切り捨て) (端数切り捨て)

1 年間の返還額 (¥201,228) 1 カ月の返還額 **(¥16,769)**

利息総額 **(¥618,568)** 1 年間の利息 **(¥41,237)** 1 カ月の利息 **(¥3,436)**
(端数切り捨て) (端数切り捨て)

課題を見つけて仲間とともに「解」を見出す学習

た」と仙波先生は話します。

カリキュラムは6時間で構成（図表1）。奨学金について必要な知識を身につけるとともに、奨学金の滞納者が増えている背景を理解して、自分がそうした状況に陥らないために

はどうすれば良いのかを考えることにしました。その際、生徒自身が主体的に課題を見つけて、仲間とともに「解」を見出していく「アクティブ・ラーニング」を取り入れています。

まず、仙波先生は、日本学生支援機構のレポート（奨学金の延滞者に関する属性調査）や奨学金の滞納が増え続けていることを取り上げた新聞記事を用意し、生徒たちに読み込

ませました。これらの資料から問題点を抽出し、自分なりの分析を行った生徒は、各自の考えを班（1班6〜7名）に持ち寄って議論し、班ごとにまとめた見解をクラス全体で発表しました。こうして奨学金制度について必要な知識を身につけるとともに、なぜ返還が滞ってしまうのか、ほかの生徒の考えも聞きながらその理由を掘り下げて考えることができたといいます。

続いて生徒たちが取り組んだのは、奨学金の返還計画のシミュレーションです。まず生徒にアンケートを実施し、①貸与希望額（月額）、②大学や専門学校卒業後の返済可能額（月額）を自分なりにイメージさせることから始めました。そのうえで、このアンケート結果をもとに、「貸与年数4年、1カ月の貸与希望額5万円、卒業後15年以内に完済、利息3%」という設例を提示して、月ごとの返還額、そのうちに占める利息額などを計算させました（図表2）。

生徒たちは、これらの計算を行うために、元利均等返済方式の場合の利息の計算方法を学びました。奨学金の借入でも用いられているこの方式は、返済額が一定で返済計画が立てやすいものの、返済当初は利息が大部分を占めるので元金部分の減り方が遅いという特徴を理解しました。



【図表3】ワークショップの流れ

課題

高校在学中に、3級ファイナンシャルプランニング技能検定試験に合格したあなたは、卒業後地元の銀行に就職しました。ある日、高校生を伴って銀行を訪れた親から、教育ローンの説明を聞きたいと言われました。

高校生からは、「親に負担をかけたくないの、奨学金を借りて大学へ進学したいと思っている。しかし、確実に返還できるかどうか心配で、借りるべきかどうか迷っている。そこで、アドバイスをもらえないだろうか」という相談を受けました。

さて、あなたはこの高校生に対して、どのようなアドバイスをしますか？

奨学金が将来のライフプランに与える影響をリアルに把握

仙波先生の学校では、課題研究として前年度から「FP（パーソナル・ファイナンシャル・プランニング）講座」を設けています。これは、生徒一人ひとりが「生きる力」を身につけるためには、長期的な視点から暮らしとお金を結びつけて考え、計画的に行動できる力を備える必要があるとの考えに基づいたものです。仙波先生はこの時間を利用して、先に行ったシミュレーション結

果を織り込む形で、ライフイベント表・キャッシュフロー表を生徒一人ひとりに作成させました。「これには、予想以上に時間がかかりました。指導する側の負担も大きいです。決して少なくはない金額を長期にわたって返還していくことが、自分の将来のライフプランにどのような影響を与えるのかをリアルに感じること、何のために奨学金を借りるのかを考えるとともに、生活設計や家計管理の大切さを深く理解できたと思います」と仙波先生。

さらに、ここで作ったライフイベント表・キャッシュフロー表は、次のワークショップでも活用しています。このワークショップでは、金融機関の窓口で顧客に教育ローンの相談に応じるといった場面を設定し、顧客が持参したライフイベント表やキャッシュフロー表から収入や支出の概要を把握し、貯蓄残高が減っていく要因などを考えるものです（図表3）。ライフイベント表・キャッシュフロー表として、生徒が前の時間で作成したものを用いたことで、生徒たちの取り組みも前向きで活発なものになりました。

そして、カリキュラムの仕上げが、「返還を滞納した場合の措置」です。

ワークショップの展開の仕方

1 個人の意見

- ・思いついた意見をできる限り付箋紙に書き出す。
- ・1枚の付箋紙に一つの意見だけ書く。
- ・質問ごとに付箋紙の色を変えると分かりやすい。
- ・書き込んだ付箋紙は、手元に置いておく。

＜考えるための材料＞

- Q1: キャッシュフロー表から読み取れる事柄を想像してみよう。
- Q2: 貯蓄残高が目減りする原因やそれを防ぐ方法について考えてみよう。
- Q3: 奨学金を借りる前と借りた後で気をつけたらよいことを考えてみよう。

2 班別討議

- ・班長から順番に付箋紙に書いた意見を読み上げて、画用紙に貼る。このとき、グループ化するため、同じ意見の人は近くに貼る。
- ・すべての意見が出たら、グループ化したものをマジックで囲み、何についての意見か名前をつける。

3 整理とまとめ

記録係が意見をまとめながら、模造紙に記入する。





返還が滞ると、「個人信用情報機関」に登録され、クレジットカードが使えなくなったり、住宅ローンが組めなくなるなど、将来の生活に大きな影響が出ることを踏まえながら、「信用と責任」についての理解を深めさせました。

目的意識を持って 進学を考える、主体的に 学び始める生徒が増加

仙波先生は、授業を終えた後、生徒に感想文を書かせることにしました。学んだことを振り返り、これを文章でまとめることによって学習内容が定着するとともに、学びに対する生徒の姿勢が一段と成長するとの考えからです。

生徒たちの感想文のなかには、「本当に奨学金を借りてまで行く学校なのか、改めて考えた」、「奨学金を毎月しっかりと返還するためには、大学卒業後、安定した職に就かなければならないと思った」などというものがありました。

「これまで周りの雰囲気でもなく、進学を思い描いていただけという生徒が、真剣に将来を見すえ

て進学を考え、家族や友だち、先生と具体的な話をするという動きが出てきました」と仙波先生。これについて、進路相談の内容もより具体的なものとなったそうです。

また、「将来設計に興味があった」、「収入から支出を引いて貯蓄するのではなく、収入から貯蓄を引き、残った分を使うのだと理解できた」など、お金の管理に対する意識の高まりを感じさせる感想も多かったといえます。実際にこの授業を受けてお小遣帳をつけはじめた生徒もいます。

さらに一連の授業を通じて、若者の就職難、雇用問題などに関心をもち、自らニュースを読み調べたり、先生や保護者に質問したりするなど、主体的に学び始める生徒が増えたことも大きな成果だと仙波先生は言います。

仙波先生は、生徒たちの頼もしい変化に手応えを感じています。

自分自身で「最適解」を 導き出す力を育てたい

高等学校の次期の学習指導要領では、より深い「アクティブ・ラーニング」が求められるようになります。

「教わっただけの知識は忘れやすいものですが、自分たちで気づいたもの、導き出したものはなかなか忘れません。奨学金をめぐる取り組んだ今回の授業のように、自分たちで課題を見つけ出し、データ分析やディスカッション、体験を通して解決策を導き出すことによって、将来にわたり活用できる生きた力が身につくはずですよ。今後は、公民科や家庭科などほかの教科とも連携し、さらに奥行きのある金融教育を進めていきたいですね」と仙波先生。

「これからの日本は、世界中どこにも前例のない超高齢社会を迎えます。予測不能な未来社会を生き抜くためにも、未だ経験したことのない問題に対する『最適解』を自分自身で考えていかなければなりません。そのためには、生徒だけでなく、私たち教師も学び続ける力が問われます。生徒に与えた『知識』が『見識』になり、さらに『胆識』（決断力、実行力を有した見識）となるよう、今後とも現実の社会の課題と向き合えるテーマを探し出し、生徒たちとともに、新しい学びを工夫していきたいと思えます」と力強く語ってくれました。

金融教育の現場レポート

『奨学金は返さないといけないの?』 ～奨学金の返還と滞納を学ぶアクティブ・ラーニング～

愛媛県
愛媛県立大洲高等学校 仙波鉄也教諭